

史上最年少の23歳で文化庁芸術祭新人賞(平成13年度・音楽部門)を受賞した片岡リサ氏。あれから9年、古典箏曲はもちろん、オーケストラとの共演や美空ひばりからバッハのコンタータまで弾き歌うなど、ジャンルを越えた片岡ワールドの魅力はさらなる広がりや深みを増している。すでに指導者としても活躍する片岡氏に、箏演奏家としての今の思いを聞いた。

先達の技と思いを継承

「箏でクラシックオーケストラと共演できるの?」って思われる方は多いと思いますが、宮城道雄(1894~1956)の流れをくむ者にすれば、オーケストラに箏がソリストとして加わるのはいたって普通のことです。

宮城道雄作品には、西洋音楽の発想を取り入れたものがたくさんあります。私の師匠の須山知行先生(大阪音楽大学名誉教授/1919~2009)は宮城道雄先生の直門で、西洋のクラシックにも精通されており、須山先生からは五線譜やクラシックはもちろん、いろいろな世界の音楽に学ぶべきだと教えられました。だからピアノやオーケストラとの共演は、そうした先生方がやっていたことを私もしているだけで、とくに目新しいことではないんですね。

また、箏の古典は江戸時代に作られたものがほとんどで、それらは基本的に弾き歌いです。ゆったりとした箏の音色に合わせて低い男声で歌う『地歌』というジャンルが確立されています。その後、宮城道雄先生が箏曲の歌曲を作り、ソプラノ歌手の伴奏をすることも多くありました。しかし、こうしたことはあまり知られておらず、私が箏で弾き歌うと珍しがられてしまうんです。

箏の素晴らしさを多くのの人に

平成22年度 大阪文化祭賞受賞
【片岡リサ氏に聞く】

大都市ならではの強み

大阪で生まれ育った私は、大阪の人情や食べ物などに大きな愛着を持っています。演奏で東京に行くことが多くなってからは、とくにそれを強く感じますね。また、大阪や関西のお客さんは笑いに対するノリがいい。演奏会などで箏について解説するとき、面白おかしく話したときの反応はすごく早いです。すると私も嬉しくなって、もっとお客様に楽しんでいただこうと、ときには話が脱線してしまうことも。それもまた楽しいんですね。

とはいえ、邦楽でも西洋音楽でも、公演数は東京のほうが圧倒的に多いです。全国から良い演奏会や演奏者が集まってきていますから、お客様も耳が肥えているし、専門的な知識を持つ人も多い。クラシックコンサートで、楽章の合間で拍手をせず静かに次の楽章がはじまるのを待っているように、聴く姿勢も心得ておられるように思います。

そうしたお客様の雰囲気の違いは、大阪と地方都市でも感じます。大阪も大都市ならではの強みを生かして、公演の数を増やすことで伝統的な邦楽に対する関心も高まり、大阪の文化力をもっと高めることができるように思います。

自分の道を究める

箏は1300年の歴史をもつ伝統楽器です。しかし現在、それを聴く人はとても少なくなってしまいました。私は大学以外でも箏を教えています。稽古に来られるのは50~60代以降の方々がほとんど。小学生となると、たった一人です。文部科学省が小中学校で邦楽の伝統楽器に触れるよう指導しているおかげで、一度は触れたことのある人が増えてきていますが、それだけでは次代の育成につながりません。だから若い人にも「箏って、ええなあ」と思ってもらうために、一般に知られた曲を演奏するのほひとつの方法だと考えています。そうして多くの人が気軽に箏を学べるようになり、優れた演奏者が育ってほしいと思っています。

今年、私は東京オペラシティ主催のリサイタル『B→C(バッハからコンテンポラリーへ)』大阪公演で、大阪文化祭賞をいただきました。21歳のときには大阪文化祭の奨励賞をいただいたのですが、当時はただがむしゃらに突き進んでいるとき。今回は自分の方向性を定め、J.S.バッハの曲を箏を弾きながら歌うという、今までにない新たなチャレンジでしたので、それが認められたことは大きな励みになりました。これを機に、もっと新しいこと、面白いことにチャレンジしていきたいと思っています。(談)

片岡リサ(かたおかりさ)

9歳で箏をはじめ、11歳で日箏連全国箏曲コンクール児童の部第1位受賞(1989年)。東京芸術大学と大阪音楽大学の両方に合格し、悩んだ末に大阪音大へ進学。在学中に大阪・いずみホールで毎年ソロリサイタルを行い、4年生で大阪文化祭賞奨励賞を受賞。以後受賞歴多数。文化庁の国内研修で声楽も修得。現在、大阪音楽大学、同志社女子大学、兵庫教育大学講師、宮城社師範。

大阪市淀川区・自宅にて

